BOOK X — 見えざる戦争

# 第08章 — 最後の通信

## 01 — 回線の向こうの声

テーブルの上の電話には、時刻を示す小さな表示画面があった。壁の時計より二分遅れていた。ロイは、話したい相手が医療協会に到着するのを待っている間に、その違いに気づいていた。

彼は壁の時計を信じることにした。

部屋の外では誰かが機械の用紙を交換していた。ありふれた物音がいくつか続いた後、機械が動き始める音がした。医師はこの部屋を一時間使わせてくれると約束していた。それ以上この建物にいられると約束した者は誰もいなかった。

彼は左手で受話器を取り、協会に電話をかけた。

電話に出た職員に名前を尋ねられ、セラ・ミンが自分からの電話を待っていると伝えた。少しして、法律顧問の声が聞こえた。

「来ていますよ」とミンは言った。「電話を代わりますね」

回線の向こうで人が動く気配がした。誰かが机に何かを置く音が聞こえた。

「ロイ？」

「ああ」

数秒間、二人とも何も言わなかった。再びレイチェルの声を聞いたとき、どんなふうに聞こえるかは分かっているつもりだった。だが、彼女が答えを聞きたくない質問をしようとするとき、呼吸の仕方がどう変わるのかまでは覚えていなかった。

「診察は痛かった？」と彼女は尋ねた。

「診察が必要になった原因のいくつかに比べれば、たいしたことはない」

彼女が笑う声が聞こえた。ほんの一瞬だった。

「腕は少し良くなった？」

「まだ分からないそうだ。手は動かせる。それ以上のことはあまりするなと言われている」

レイチェルはミンの机の前に座っていた。法律顧問は扉を半分開けたまま隣の事務室へ移動していた。目の前の机には、レイチェルが署名した陳述書の写しがまだ置かれていた。

「眠れる場所はあるの？」と彼女は尋ねた。

「今のところはない」

「じゃあ、私も同じね」

ロイがどういう意味か尋ねると、彼女は建物の所有者が入居者についての情報を提出するよう求められたことを話した。必要な物は協会へ持ってきている。戻るべきかどうか、決めかねているのだという。

ロイは研究資料を持っているのかと尋ねた。

「資料は今のところ安全よ。それに、エイドリアンの陳述書もここにある」

「そういうことを聞いたんじゃない」

「分かってる」

彼女は自分の鞄に目をやった。かつてなら、その中にある重要な物を一つ残らず説明できたはずだった。今、重要な物は、彼女が知らない者も含めた複数の人々の手に分散し、二度と足を踏み入れられないかもしれない建物に保管されていた。

「もう私が唯一の写しを持ち歩く必要はないの」

ロイはそれを聞いてうれしく思った。レイチェルと、病院で始めた研究の両方を守る方法を考え出せずにいたのだ。彼女が、研究が自分とは独立して存続できるように手配したと知り、うまく説明できない安堵を覚えた。

彼は、あの実験について今も考えているのかと尋ねた。

「毎日ね」

「今も可能だと思うか？」

「始めたときより多くのことを知ることはできると思う。それとは違うわ」

診察室の扉の前を台車が通り過ぎた。ロイは車輪の音が聞こえなくなるまで待った。

「それでいい」と彼は言った。

レイチェルは机の上の陳述書に手を重ねた。

「あなたに会いたい」

「俺もだ」

彼女は自分が行くまでその場所にいさせてもらえないか、医師に頼めないかと尋ねた。ロイは部屋の使用時間が限られており、すでに施設にも照会が来ていることを説明した。住所は伝えなかった。伝えていいものか考えていたとき、彼女が次の質問をした。

「私が行くことになったら、そこに留まる？」

「たぶんな」

「医師に出ていくよう言われても？」

彼は窓の方を見た。向かいの建物の壁に明かりがついた。

「もう少し時間をくれるよう頼む」

「だったら、住所は聞かないことにする」

レイチェルにとって、それは容易な決断ではなかった。離別してからずっと、二人が部屋の向こう側に互いの姿を見つけ、他の誰かにとってその動きが何を意味するかなど考えず、歩み寄る場所を思い描いてきたのだ。

想像の中の場所には何の問題もなかった。彼女より先にそこに到着してしまうかもしれない人々のことが、分からなかった。

「別の手配をするのをミンに手伝ってもらいましょう」

彼は同意した。

電話からかすかな音がした。機器が別の回線に接続されるときに生じる音に似ていた。複数の内線が一本の回線を共有する建物で、以前にも聞いたことがあった。それ以外の何かを意味する音なのか、知る術はなかった。

レイチェルにも聞こえていた。

「まだいる？」

「ああ」

すべてうまくいくと彼女に言ってやりたかった。彼は、その言葉の価値も、それが何の役にも立たなくなる状況も理解できるほど長く生きてきた。

「電話に出てくれて、本当にうれしいよ」彼は代わりにそう言った。

## 02 — 会話の記録

協会の通信へのアクセス申請は、確保命令を担当する事務局を通じて提出されたものではなかった。上層地区での追加調査を調整する部門が提出していた。その違いは行政記録に残されていたが、申請の結果として指示を受ける大半の人々には見えなかった。

通信当局の民間職員の女性には、電話番号の一覧と、政府の重要業務の継続性に関する規定の参照情報が与えられていた。一覧には医療協会の代表番号と、調査に関連する記録を保管することになった施設が使用する三つの番号が含まれていた。

彼女は、指示が通話の内容に関するものなのか、それとも接続記録に関するものなのかと尋ねた。

上司は、最初の措置は接続記録に関するものだと答えた。特定の会話の内容を取得するには、追加の承認が必要だった。要請には、会話の取得対象となり得る人物は指定されていなかった。

「どの通話が医療に関するものか、把握する必要はありますか？」と彼女は尋ねた。

上司は要請書を読み直した。個々の記録が使用可能かどうかを判断するのは、情報を受け取る部門の責任だと言った。

彼女は端末に戻った。

司令部では、勤務時間が終わる少し前に、デレン大尉がその手配に関する通知を受け取った。間もなく情報が得られる可能性のある機関として、協会が記載されていた。通知には「優先接続」という見出しの欄があった。

その欄には何も記入されていなかった。

デレンは連絡将校に電話をかけ、どの接続を優先するか誰が決定するのかと尋ねた。

「調査部門が選別したものを送ってきます」

「何を基準に？」

「基準はまだ提示されていません」

デレンは、患者に関する助言を求めて協会に電話した医師を、その資料から特定できるのかと尋ねた。将校は、受け取る記録によると答えた。

「その患者が確保対象だったら？」

「関連情報ということになります」

デレンは手元の確保命令の写しを見た。対象者の記述の横には、その人物に備わっているとされる並外れた能力について記した付属文書の参照情報があった。命令書には、捜索の間に日常の活動を妨げられる可能性のある人々の一覧はなかった。

彼は通知を持ってヴェイルの執務室へ行った。

ヴェイルは追加の輸送手段の要請について、ある将校と話していた。将校が去ると、手短に済ませるようデレンに言った。デレンは書類をテーブルに置いた。

「ある人間が実際に診察を受けたと分かる前に、どこで診察を手配したかを知ることができてしまいます」

ヴェイルは、調査から有用な結果が得られる方法の一つだと言った。治療を受ける人物の身元は、それでも確認する必要がある。

「その情報の利用を制限するよう、私は要請しました」

「知っている」

ヴェイルの端末にはその要請書があった。返送されてきた受領通知をデレンに見せた。追加措置の範囲を決定する部門へ回付されていた。

「決定は出ていませんね」とデレンは言った。

「拒否もされていない」

デレンは少しの間黙った。作戦の実行許可を待つとはどういうことか知っていた。まだ始まっていないことに関しては、待つことの意味は極めて明確だった。今回の場合、それが何を意味するのか、彼にはよく分からなかった。

「制限について検討している間、その部門は待つのですか？」

ヴェイルは、既存の指示は引き続き有効だと答えた。

デレンは通知を折り畳んだ。退出する前に、病院で収集された機密扱いの医療情報が、接続記録を調べる人々に提供されたことはあるのかと尋ねた。ヴェイルは知らないと答えた。

その晩、手配に変更は加えられなかった。

通信当局の事務室で、民間職員の女性は従事している業務の修正された参照番号を受け取った。これにより、記録を調べる部門は、要請が承認された後に受信した結果にアクセスできるようになった。彼女はその参照番号を業務記録に追加した。

電話を使う人々にとって、変更の結果はすぐに明らかになるものではなかった。ほとんどの通話は前日とほぼ同じようにつながった。ごく少数の通話が追加の調査に回された。

そのうちの一つは、協会と上層地区の診断施設との接続だった。

その回線の両端で誰が話したのか、職員にはまだ分かっていなかった。

## 03 — 省かれた記録

日が暮れて間もなく、エイドリアンは最初の資料を受け取った。イマニは病院の管理部門から、保全された記録の範囲を確認する目的で、一部の資料の複写が認められると聞いていた。以前の実験の目録の写しも含めるよう要請していた。

その目録は、二人が病院で行った研究よりもずっと前に作成されていた。大半の項目には、使用された実験について知らなくても理解できる表現で、装置や資材の説明が記されていた。中には、もはや所在を確認できない文書を参照しているものもあった。

エイドリアンはすでに別の版の目録を見ていた。二つの写しを並べた。

古い方の版では、二人が移管記録の中で見つけた参照番号に該当する項目に続いて、それに付随する観測記録の説明があった。今夜受け取った版では、その説明が、技術資料は別途保管されていることを示す短い記述に置き換えられていた。

変更箇所の横に日付はなかった。

彼はイマニに電話をかけ、発見したことを伝えた。

「いつ変更されたか分かる？」と彼女は尋ねた。

「これだけでは分からない」

病院の写しは、古い参考資料の集まりから作られたものだと彼女は言った。それを見つけた職員は、その資料がどのように集められたのか知らなかった。

エイドリアンは、原本のページを他の資料とともに保全できないか尋ねた。イマニは、そのページを資料の集まりから取り除かないよう職員に頼むと約束した。

彼は次の三十分を資料の比較に費やした。説明が変わっていない項目の一覧と、対応する項目を見つけられないものの一覧を作った。時折、国防事務局内の部門名を知るきっかけとなった移管記録に立ち戻った。

失われた観測記録がかつて装置とは独立して識別されていたことを確認できるだけの資料がそろったのは、これが初めてだった。

その違いは重要だった。装置の一覧からは、誰かが何を行えた可能性があるのかを知ることができる。観測記録の存在は、誰かが実際に何かを行ったことを示している。何を行ったのかは、まだ確認できていなかったが。

彼の机には、レイチェルが協会を通じて送ってきたメモがあった。研究を再開できた場合に調べられると考えている問題が記されていた。以前の実験試料が予想どおりに反応しなかったことも、その一つだった。

試料の検査案について返事を送るつもりだった。だが代わりに、過去の研究中に作成された別個の観測記録が存在した証拠があり、その所在は依然として不明である、と書いた。

保全のためにミンへ送る前に、その文章を二度読み直した。「軍事実験」という言葉は使わなかった。実験の目的も、行われた条件も、まだ確認できていなかったからだ。

その言葉が頭に浮かんだという事実は、証拠にはならなかった。

引き出しから、ロイの治療中に出された疑問をいくつか書き留めたノートを取り出した。そのうちのいくつかは、組織の修復速度と、その過程が有効でなくなる条件との関係についてのものだった。彼は、その条件の一つを変えて寿命を延ばそうとすれば、短期間の一連の検査では明らかにならない影響が生じる可能性があると、ますます確信するようになっていた。

彼がその問題について考えていると、イマニが訪ねてきた。

彼女は保全された目録の写しを持ってきていた。エイドリアンは自分が行った比較を見せ、変更されていた項目を指さした。

「彼らは何を測定する必要があったのかしら？」と彼女は尋ねた。

「何かを長持ちさせたかったのか、それともなぜ止まるのかを知りたかったのかによる」

彼女は机の上のノートを見た。

「測定する内容は違うの？」

「一部はね」

ある過程の持続時間を確認するための調査では、その過程が終わるのを防ごうとする者にとって不可欠な情報が省かれる場合もある、と彼は説明した。装置が故障する条件を特定することで試験を行いながら、その条件を変更することは一度も試みないということも可能なのだ。

イマニは古い目録の説明を見ていた。

「何かが止まるまでの時間を調べるだけにしては、ずいぶん高くつく方法ね」

エイドリアンはすぐには答えなかった。

彼女が提起した疑問は、ロイの診療記録を調べても解決できるものではなかった。彼を説得して別の実験を受けてもらっても、解決できるものではなかった。どこかに、今の二人とは異なる問いを立てていた者たちが作成した観測記録があるのだ。

彼は、その者たちが何を知ろうとしていたのかを知りたかった。

## 04 — 滞在の要請

リアンは検査区域の外にある受付にいた。そこへ職員が来て、医師がもう一度話をしたいと言っていると告げた。その日の午後に行われた検査について、施設の管理部門に追加情報の要請が届いていた。紹介元の医師ではなく、施設宛てに送られていた。

医師は、その要請が先に届いた記録保全に関する通知の延長なのかどうかを確認しようとしていた。管理責任者は、その件を法的照会の担当者へ回していた。医師の意見を求めた者は誰もいなかった。

「患者の身元を明らかにするよう求められているのですか？」とリアンは尋ねた。

「どの機関から紹介されたのかを確認したいそうです」

彼女は、特定の検査が指定されているのか尋ねた。医師は、別の場所にも情報が存在する可能性のある複数の検査についてだと説明し、閲覧を許可された部分を彼女に見せた。

医療協会への言及があった。

リアンは時間を確認した。ロイにはさらに一時間の部屋の使用が認められていたが、残りは二十分足らずだった。しばらくの間、彼が話している声は聞こえていなかった。

医師は、患者に退去を求める指示も、退去を妨げる指示も、依然として出ていないと話した。問題は、施設が夕方に検査区域を閉鎖することだった。管理部門と調整しない限り、いつまでも開けておくことはできない。

「別の場所に部屋を用意できないか頼んでいます。まだ返事はありません」

リアンは礼を言った。彼女が検査を手配した際に求めた以上の時間を、すでに彼が提供してくれたことは分かっていた。

彼女は廊下を戻った。ノックをするとロイが扉を開けた。

「閉まるのか？」と彼は尋ねた。

「もうすぐです。電話は済みましたか？」

「今のところは」

連絡を取ろうとしていた人と話ができたと彼は言った。施設を出る前に、もう一度協会へ電話をかけると約束していた。リアンは別の照会が届いたことを伝え、それについて分かっていることを説明した。

彼女は、彼が誰と話していいのか、何を話していいのかは言わなかった。それは自分が決めることではなかった。ただし、休息を取らなければ、怪我の治療がより難しくなるかもしれないとは伝えた。

彼は朝まで施設に留まれる可能性があるか尋ねた。

「この部屋では無理です。別の場所を手配できないか試みています」

ロイはテーブルのそばの椅子を見た。ここに来たときには、その椅子で一夜を過ごさせてくれと頼むことになるなど考えてもいなかった。

「少しなら待てる」と彼は言った。

リアンは検査区域が閉まるまでここに残ると申し出た。受付へ戻ろうとしたところで、ロイがその晩は自分の診療所に戻るつもりなのかと尋ねた。

彼女は、今日はもうそちらでの予約はないと答えた。

「なら、家に帰れるんじゃないか？」

「あなたの行き先が見つかったら」

彼は彼女を見た。別の照会が届く前に立ち去りたいと考えても不思議ではない理由が、いくつもあった。この部屋に来る前に、そのうちいくつを考慮しなければならなかったのだろうと思った。

彼女はテーブルから椅子を引き出し、少しの間腰を下ろした。捜索を行う者たちの判断について医師たちに責任を負わせることなく、治療を受けた施設に留まることは可能だと彼に話した。捜索を行う者たちが何をするかについて、確約はできない。だが、彼の腕について意見を述べることはできる。

「私の意見では、今日はもう十分すぎるほど歩きましたよ」

彼は微笑んだ。

受付では、部屋を提供できるかもしれない病院からの電話を、職員がつなごうとしていた。医師は紹介についてさらに説明するよう求められていた。電話を受けるため、自分の執務室へ向かった。

リアンがまだロイと一緒に座っていると、テーブルの電話が突然、短く鳴った。ロイが受話器を取ったとき、回線の向こうには誰もいなかった。

彼は受話器を戻した。

施設と医療協会との接続が調査に回されたことを、二人はまだ知らされていなかった。

## 05 — 聞くことへの命令

M-06は共用室に座っていた。そこへ職員が来て、作戦説明に出席するよう求められていると告げた。彼女は民間医師から受け取ったカードをコートのポケットに入れてから、上の階へ向かった。M-04はすでに部屋にいた。今後の作戦で要員の協力が必要になる可能性のある上層地区の場所を列挙した一覧を確認するよう求められていた。

そのいずれの場所についても、作戦が承認されたことを示す記載はなかった。

M-08は彼女の後に入ってきた。もう医療部門の将校は付き添っていなかった。彼はテーブルの反対側の端に座り、左手を目の前の天板に置いた。傷は袖に隠れていたが、腕を動かすときの慎重な様子を見て、M-06には心当たりがあるような気がした。

ロイとの遭遇について、彼女は彼と話したことがなかった。それについて尋ねたいことがあったが、二人だけで長くいられる時間は一度も与えられなかった。

説明を担当する将校は、朝までに対象者に関する追加情報が得られる可能性があると説明した。要員は待機を求められた。情報が届くまでの間、三人は立ち入ることを求められる可能性のある施設の状況を把握しておくことになった。

将校は民間の診療所が入っている建物の入口の写真を表示した。

M-06はその日の午後に通った扉だと分かった。

彼女は、対象者と思われる人物が建物に入るところを目撃されたのかと尋ねた。将校はそのような目撃情報はないと答えた。対象者が民間の医療紹介制度を通じて支援を得た可能性について調査しているところだった。

M-08は、公共の場所ではなく医療施設内にいる人物に接近する場合、指示は異なるのかと尋ねた。

将校は作戦時に状況を評価すると答えた。要員には武力行使に適用される条件が改めて告げられた。

M-04は目の前の書類のページをめくった。

「その人物が患者だった場合、どのような条件なら移動させられるのか、誰が判断するのですか？」

将校は司令部がその件について助言を求めていると答えた。助言が届くまで、既存の承認は有効だった。

M-06は写真を見た。扉の横に小さな看板があり、医師の診療所が何階にあるかが記されていた。通りからその建物を見つけるのは難しかった。写真は、診療所を出た後に医師のカードを手にして彼女が立っていた場所とほぼ同じ位置から撮影されていた。

「その住所にいる人々の誰かに、何かをするよう要請は出ているのですか？」と彼女は尋ねた。

「照会は民間の事務局が行っている」

「そこの医師から、私の雇用主に診察の記録を渡す義務はないと聞きました」

部屋が静まり返った。M-04は書類のページをめくる手を止めた。

将校が彼女を見た。

「そこで診察を受けたのか？」

「相談です。今日です」

将校は、施設がその受診を手配したのかと尋ねた。彼女は外出が認められた時間内に自分で手配したと答えた。独立した診察の要請に対して受け取った受領通知を見せてもよいと申し出た。

将校は管理事務局にその件を回す必要があると言った。彼女は、してはならないことをしたのかと尋ねた。

「ここで答えられる質問ではない」

普段、自分に何が許され、何が許されないのかを告げられる部屋で、そのような答えが返ってくるのは奇妙だと彼女は思った。

将校は説明を続けた。M-06は要員に解散が告げられるまで席に留まった。相談について再び尋ねる者はいなかった。

廊下でM-04が彼女を待っていた。

「なぜ話したんだ？」と彼は尋ねた。

彼女は、参加することが予定されている作戦の説明中にあの写真が示されたのだと答えた。自分はあの場所について知っていることがある。別の誰かが彼女に関する同じ情報を記録から得たら、何が起きるか分からなかった。

「待つこともできた」

「他の誰かがあの人に話すまで？」

M-04はその言葉を考えた。管理事務局が彼女の受診をどう評価するのか分からなかった。以前、要請する際に使うべき書類について彼女に助言することはできた。だが、その書類から、要請をしたというだけで要請者自身が調査の対象になるなどと考える理由は何もなかった。

「説明の場で何が語られたか、俺から伝えることはできる」と彼は言った。

彼女は礼を言った。

M-08が階段の近くに立っていた。二人が話し終えるのを待ってから近づいてきた。彼はM-06に、医師から武力行使について何か助言を受けたか尋ねた。

「私が下した判断について話したの」と彼女は答えた。

彼はその答えに満足していないようだった。自分の左手に目を落とした。

「正しい判断をしたと言われたのか？」

「いいえ。なぜそう判断したのか聞かれた」

M-08はそれ以上尋ねなかった。普段よりゆっくりと歩き、下の階へ降りていった。

M-06は彼を見送った。彼の腕について尋ねたいことがいくつかあった。答えを測定する者が誰もいないときなら、もっとよく答えられるのではないかと彼女は思った。

## 06 — 二度目の承認

診断施設と協会との間の接続に関する要請が追加調査を担当する部門に届いたのは、六時二十三分だった。同じ施設からそれ以前に行われた通話の記録が添付されていた。最も長い通話の継続時間が示されていた。電話をかけた人物の身元は示されていなかった。

職員は記録と最近の紹介先の一覧を照合し、連絡事務局へ勧告を転送した。その施設は、調査に関連する検査が行われた可能性のある場所として特定されていた。今では、協会に関係する誰かがまだそこにいる可能性のある場所だと考えられていた。

デレンは端末に表示された勧告を読んだ。M-08に関わる一件以来、受け取った中で最も具体的な、対象者の所在の可能性に関する情報だった。同時に、それは二つの別の情報から導いた推論でもあり、そのいずれも対象者がそこにいることを立証していなかった。

彼は勧告の根拠となった観測情報を求めた。

回答は時刻、施設の名称、接続時間で構成されていた。

彼は会話の内容の記録があるか尋ねた。連絡将校は追加の承認が要請されており、通信当局からは要請を満たせるかどうか、まだ回答がないと説明した。

デレンは、医療検査と電話での通話は対象者の目撃情報にはならないと伝えた。

「異論はありません」と将校は言った。「ですが、部門は別の手段による確認を求めています」

「どんな手段だ？」

自治体当局の係官が施設に派遣されると知らされた。その係官が軍の要員の立ち会いが必要になる可能性を示す情報を得れば、軍の要員を用意することができた。

デレンは、そのような要員が建物へ向かうよう指示される前に知らせてほしいと求めた。続いて、自治体の係官に発せられた指示の写しを求めた。

連絡将校は、指示が発せられれば写しを提供できると答えた。

彼は再びヴェイルに会いに行った。大佐は作戦の状況の変更に関する文書を読んでいた。別の画面には、診断施設の位置がすでに示された地図が映っていた。デレンは自分の書類をテーブルに置く前に、その画面を見た。

「彼がそこにいることは確認できていません」

ヴェイルは、さらなる情報なしに要員を建物に突入させるつもりはないと答えた。

「すでに別の者がそこへ向かっています」

「情報を得るためだ」

デレンは、病院での以前の遭遇によって、情報を求める係官が現れることと、作戦が始まることとの間にほとんど違いがない場合があることが示されたと説明した。対象者はすでに負傷していた。次の遭遇は、取り返しのつかない結果をもたらすかもしれなかった。

ヴェイルは確保命令を見た。

「君の異議は記録されている、大尉」

「彼を見つけることに異議を唱えているのではありません」

「では、私にどうしてほしいのだ？」

デレンは、民間施設で再び確保を試みる前に、対象者の存在の確認と医学的な評価を義務づける指示を求めた。ヴェイルは、作戦を指揮する当局に勧告することならできると答えた。検討中の措置と、当初要員に与えられた指示とを混同しないよう、デレンに忠告した。

デレンは両者を混同してはいなかった。両者の重なる部分が増えつつあることを説明しようとしていたのだ。

執務室に戻ると、地域施設からの報告書が届いていた。施設からの許可された外出と、その間に指定要員の一人が受けた民間での相談についての報告だった。人事部門は、その受診が作戦に関係する活動に当たるかどうかを尋ねていた。

識別番号はM-06だった。

彼は報告書を二度読んだ。以前にも、彼女の診察要請がロイに関する調査と関係しているか尋ねられていた。両者がともに民間医師に関わるという事実以外に、二つを結びつける理由はまだ提示されていなかった。

彼は、その医師に相談することを当該要員に求める作戦上の指示は発せられていない、と書いた。その相談に作戦上の目的があったとは確認できなかった。これ以上の質問は、彼女の医療に関する事項を判断する権限を持つ当局に向けられるべきだった。

回答を送る前に、その相談は対象者がその住所にいたことの証拠にはならないとする一文を加えた。

ある事実から何を立証できないのかを説明するために、その晩、彼が書くことを求められた二つ目の陳述だった。

## 07 — 通信の途絶

協会でレイチェルは、隣の事務室にいる女性から研究資料の保管方法について説明を受けていた。病院に戻らなくても、自分が署名した陳述書の写しをもう一部入手できると分かった。原本の記録は、合意または強制力のある命令によって取り決めが変更されない限り、現在の場所に残される。

彼女は女性に礼を言った。ミンの事務室に戻ると、机の向こうの椅子には誰もいなかった。

少しして、法律顧問が印刷された通知を手に入ってきた。夜間業務の職員が、協会の電話回線の一部に通信の中断が生じる可能性があると知らされていた。中断の継続時間については何も記されていなかった。

「いつ？」とレイチェルは尋ねた。

「分からないそうです」

ミンは、可能な限り長く着信を受けられる状態にしておくよう職員に頼んだ。事務室に戻り、扉を閉めた。

「ロイがもう一度電話すると言っていました」とレイチェルは伝えた。

「ここで待ちましょう」

扉をノックする音がした。法律委員会の委員長が、協会と、保全された病院の記録について照会が行われた施設との間の最近の通信に関する照会を受け取っていた。回答する前にミンに読んでほしいという。

要請書では、照会の対象となった記録は特定されていなかった。関連する通信が行われた可能性のある期間が記されていた。委員長は、通常は連絡を取らない施設との接触があったかどうかを示すよう協会に求める段落を指さした。

ミンは、その情報が何に使われるのか知っているかと委員長に尋ねた。

政府の調査に関連して出された要請だと彼は答えた。

「それでは用途の説明になっていません」

彼は書類を彼女の机に置いた。翌朝には回答が期待されていると知らされていた。

レイチェルは二人が書類を読むのを見守っていた。机の上の電話のことを考えた。ロイは病室が空くのを待っているかもしれないし、彼女に電話をかけてきた部屋の椅子に座っているかもしれない。住所は聞かないと彼に言った。今では、彼に尋ねることなく、まさにその情報を求めている者たちがいるかもしれないと分かった。

ミンは協会の記録の責任者と話しに行った。レイチェルは事務室に残った。隣の部屋で電話が鳴っているのが聞こえた。いつもより長く鳴り続け、それから止まった。

診断施設では、空いているベッドを確保できればロイの入院を検討すると、ある病院が同意したことをリアンが知らされた。病院は医師の意見と、患者本人が入院を希望していることの確認を求めていた。まだベッドの確保は約束されていなかった。

彼女はロイにそのことを説明した。彼はどれくらい時間がかかりそうかと尋ねた。

「分かりません」

彼は時計を見た。部屋の使用を認められた一時間のうち、残りはわずか数分だった。

「よければ、今のうちにもう一本電話をかけておきたい」

彼が電話を使う間、彼女は廊下に出た。

最初はいつもの信号音がした。それから、電話をつなぐことができないという録音音声が聞こえた。彼は受話器を置き、もう一度試した。二度目はしばらく何の音もせず、その後、電話機が使用可能であることを示す音がした。

彼は部屋の外の受付に電話した。職員がすぐに応答した。

「電話に何か問題があるんですか？」と彼は尋ねた。

職員は、施設外の番号になかなかつながらないと、別の人からも報告があったと答えた。通信サービスに問題が起きているかどうか、電話の担当者に聞いてみると申し出た。

ロイは礼を言い、受話器を置いた。

しばらくしてリアンが戻ってきた。彼は電話がつながらなかったと話した。彼女は鞄から自分の携帯電話を取り出し、番号が分かるか尋ねた。分かってはいるが、そのために彼女自身の電話を使うべきではないと思う、と彼は答えた。

彼の言わんとすることを彼女は理解した。だが、すぐには電話をしまわなかった。

「何を伝えるつもりだったのですか？」

「ここを出ると」

「まだ出ていく必要はありませんよ」

受付の方で人の声が聞こえた。一人の男が施設に到着し、管理責任者と話したいと申し出ていた。職員は検査区域がまもなく閉まることを説明した。男は、照会の内容はその日の早い時間に行われた検査に関するものだと答えた。

リアンは扉の方を向いた。

ロイは立ち上がった。

## 08 — 最後の通信

レイチェルは事務室の窓から外を眺めているとき、自分の携帯電話が振動するのを感じた。部屋を使わせてくれていた女性からのメッセージだった。建物の所有者は、通知とそれに添えられた要請書が検討されるまで、入居者に関する情報を一切提供しないことを決めたという。女性は、レイチェルがその晩に戻ってくるかどうかを知りたがっていた。

彼女はまだ分からないと書いた。これまでにしてくれたすべてのことに礼を言った。

ミンが戻ってきた。主事務室が使用する回線は断続的に機能するようになっていた。問題が協会の機器にあるのか、外部の通信サービスにあるのかは確認できていなかった。法律顧問は腰を下ろし、受話器を取って耳を傾けた。

いつもの信号音が聞こえた。

レイチェルは、ロイがすでに電話をかけようとした可能性はあるかと尋ねた。ミンはあり得ると答えた。彼にもう一度電話をかける機会が与えられるかは分からなかった。

「電話がかけられたかどうか、誰かに調べてもらえませんか？」

法律顧問は彼女を見た。その質問には答えがある。しかし、答えを得るには、まさに政府が求めていた種類の記録が関わってくる。職員は、協会自身の通信サービスまで着信が届いたかどうかなら確認できると説明した。接続が確立されなかった通話まで記録に現れるかどうかは確かではなかった。

レイチェルは、それ以上の照会はしないよう頼んだ。

二人は待った。

診察室でロイはコートを着た。リアンは、受付にいる男の前に出頭するよう求められたわけではないと彼に告げた。医師は管理責任者と話していた。照会が何に関するものかを確認する間、彼には留まっていてほしかった。

「俺がここに残ったら、あなたは彼らに何を話さなければならない？」と彼は尋ねた。

「話す義務のないことは、何も話しません」

彼女を疑う理由はなかった。彼が疑っていたのは、彼女の引いたその境界線が、その晩の残りの時間も変わらずにいられるかどうかだった。

可能になったらまた診察を受けると彼は伝えた。その日受けた検査の結果を保管しておいてほしいと頼んだ。

「必要なのは治療です。ただ検査の記録があればいいのではありません」

「分かっている」

しばらく、彼はテーブルのそばに留まった。その電話は、二人が別れて以来、レイチェルとの唯一の会話をもたらしてくれたものだった。そこから立ち去るということは、思っていた以上に受け入れがたいことだった。もう一度だけ電話を試みてもいいか、リアンに尋ねた。

彼女はうなずいた。

彼は協会に電話をかけた。数秒間、何の音もしなかった。受話器を戻そうとしたとき、職員が応答した。ミンに代わってほしいと頼んだ。少し時間がかかり、それからレイチェルの声が聞こえた。

「ロイ？」

彼は目を閉じた。

「ここにいる」

「回線が使えなくなったと思っていたわ」

「実際、使えなくなっていた。聞いてくれ、もうここを出なければならない」

彼女は危険が迫っているのかと尋ねた。ロイは一人の男が施設にやって来たこと、その男が何をするために派遣されたのかは分からないことを伝えた。それが明らかになる前に立ち去るつもりだと言った。

「行き先は決まっているの？」

「まだだ。一晩中そこにいて待つんじゃないぞ」

彼女は机の反対側に立っているミンを見た。病院へ来る前に二人がいた場所のことを考えてみてほしいと彼に頼んだ。そこにいる理由を説明しなければならない者としてではなく、助けを必要とする者として扱ってもらえた場所があった。その場所の名前は口にしなかった。

「覚えている」と彼は言った。

「できるときに、私に会う必要があると誰かに伝えて。私もそうするから」

そうすると彼は答えた。

自分の身体を大事にすると約束して、と頼もうとした。だが、二人のどちらにも予想できなかった状況の中で、彼はまさにそうしてきたのだと気づいた。代わりに、また始められるようになったら、研究を続けるつもりだと彼に伝えた。

「誰かが私たちに百年を約束したからじゃない」

「分かっている」

「私たちには、確かめることができるはずだから」

回線から別の物音が聞こえた。

「レイチェル」

間があった。彼女は彼の名前を呼んだ。自分の声が聞こえたかどうか、彼には分からなかった。そして答える前に信号が消えた。

もう数秒間、彼は受話器を握っていた。リアンがそばに来ていた。何が話されたのかは尋ねなかった。彼がようやく受話器を置くと、彼女は検査の内容と診療所の連絡先を記したメモを渡した。別の医師に怪我の説明をする必要が生じたら使えると伝えた。

彼は礼を述べ、一般の出入口へ通じるのはどの扉かと尋ねた。

彼女は道を案内した。受付に着いたとき、医師はまだ管理責任者と話していた。やって来た男は膝の上に書類を載せ、椅子に座っていた。ロイとリアンが通り過ぎると顔を上げたが、二人のどちらかを認識したことを示す様子はなかった。

歩道に出ると、リアンはもう少し先まで付き添ってほしいかと尋ねた。

必要ないと彼は答えた。

彼女は交差点の方へ歩いていく彼を見送った。彼は一度立ち止まり、腕の位置を直した。二人の間を車両が通過した。再び通りの向こう側が見えるようになったとき、彼の姿は消えていた。

協会では、レイチェルがまだ受話器を握っていた。最後に彼が言ったことは聞こえたかとミンが尋ねた。

「私の名前を呼んだわ」

彼女は電話を置き、コートを取りに行った。机の上には、研究記録がどこに保管されるかを定めた陳述書があった。ミンが署名済みの写しを保管していることを確かめた。

「もし明日戻らなくても、それに関することを進めるのに、私を待つ必要はありません」

ミンは分かったと答えた。レイチェルに行く場所があるのかと尋ねた。

レイチェルは部屋から持ってきた小さな鞄を手に取った。

「どこから始めればいいかは分かると思います」

司令部に、調査に回された接続が、追加情報を得られる前に途絶したとの報告が届いた。報告書では発信者の身元は確認されていなかった。デレンはそれを読み、施設の状況の確認を求めた。

依然として、裏づけの取れた目撃情報はなかった。

彼は地図を見た。ロイが見つかる可能性があると考えられたいくつもの住所に印がつけられていた。その数は一日の間に増えていた。しかし、それとともにロイが行ける場所の数が増えたと考える理由は何もなかった。

協会の外で、レイチェルは扉の上の照明の下に立った。使わせてもらっていた部屋に戻る時間はまだあった。彼女はその方向へ延びる通りを見て、それから下層地区へ向かう通りを見た。

彼女は数日間、もう一度ロイの声が聞けることを願って過ごしてきた。

もう、電話のそばで待っているだけでは足りなかった。

第08章 終。